

まちづくり ひろしま

被爆100年(西暦2045年)の姿をめざして

第54号 (令和3年7月15日)

読者数：661名(募集中)

メール：hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp

HP：<https://machizukurihiroshima.web.fc2.com/index.htm>

〒733-0002 広島市西区楠木町1-9-7

発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二

配信元：広島アイデアコンペ実行委員会

ご提案・ご意見等は、こちらまで

ポスト・コロナを目指して乗り越えていこう！



○広島・八丁堀再開発計画イメージ



○被服支廠キャンペーン
キャンペナーズオープンMTG



○Hihukusho ラジオ報告
比治山からの眺望(ブログ「江戸東京
発今昔物語」より)



○西国街道にまつわる活動
西国茶やBar パフォーマンス風景

目次

- 巻頭言： 市民は、すでに気付いている
……………中国セントラルコンサルタント代表 前岡智之
- ひろしまのまちづくりの動き
 - ・広島県、被服支廠の耐震化決定
 - ・広島・八丁堀再開発計画
- 広島の復興の軌跡・人物編：浅地広(元広島市公園緑地部長)：編集委員 石丸紀興
- ほっとコーナー：里山から「世界」と…安芸高田市地域おこし協力隊 福岡奈織
- 被服支廠キャンペーン：キャンペナーズオープンMTG(第2回)
- 人物登場：西村宏子(シュモーターに学ぶ会代表)
- Hihukusho ラジオ報告：ゲスト 宇城 昇(毎日新聞社広島支局長)
- 西国街道にまつわる活動：ディレクター/プロデューサー 築島 涉
- お知らせ：令和3年 響け!平和の鐘 祈念式
- 編集後記：広島サッカー場建設用地に被爆遺構…………… 編集委員 瀧口信二



市民は、すでに気付いている

中国セントラルコンサルタント代表 前岡智之

私は昭和22年に生まれた。戦前京橋町で和菓子屋を営んでおり、銘菓“双葉柿”は、産業奨励館（原爆ドーム）に陳列されていたと祖母から聞いていた。両親は大変よく働き、二人兄弟を育ててくれた。父親は朝から晩まで炎天下で真っ黒になって働いた。家に帰ってほっとした時、“これはワシの〈ぶに〉じゃけえ”とよく言っていた。私は、この〈ぶに〉をこの世における役割、避けて通れない道、天職、などと理解していた。

新型コロナウイルスの出現は、これまでの生活習慣や社会常識を根底から考え直すことを迫ったし、まちのあり方までも変えていくことになった。数年後には、治療法やワクチンが世界中で接種されて収束し、ウイルス発生以前の社会生活が取り戻されると考える方もいるだろうが、感染ウイルス等はずっとあり続けると考えるべきであろう。

そして、地球の温暖化や自然資源の枯渇などから地球環境の回復不可避について警鐘が鳴らされ、**脱炭素化社会への転換が世界の喫緊の課題**となっている。SDGs（持続可能な開発目標）の取り組みは、世界共通であり、国際平和都市広島も例外ではない。これまでの社会経済構造の大きな問題点が指摘され、新しい社会生活スタイルを組み立てていかねばならない。経済優先の競争社会から平準化社会へ目標転換が叫ばれている。

都市計画に関わっていると不思議なことに出くわしたものだ。地方や県、市町村でそれぞれ将来の人口目標を掲げ、これに向けてまちづくりの政策を組み立てていくが、これらの人口目標を合計すると国レベルで予測する人口に比べてはるかに多い数値になってしまう。実質的な人口の値は目標とする数値よりも低い。以前は、右肩上がりの推計や人口移動の加算によりつじつまを合わせてきたが、間違っている。

今、広島市は、「**200万人広島都市圏構想**」を掲げる。広島市の人口は、2020年1,185,799人、2040年には1,093,410人、減少率7.8%、また高齢化率36.1%と予想されている。この値も推定時期が経つにつれて、人口減少傾向や高齢化率の上昇傾向がより強く継続する。いわゆる急激に右肩下がりの時代になっているのだ。

そこで、市は、「来るべき人口減少に備え、市民と認識を共有し、目指すべき将来の方向と人口の将来展望を示した「**世界に誇れる『まち』広島**」人口ビジョンを策定した。これを実現していくために「世界に誇れる『まち』広島」創生総合戦略に掲げた施策等を着実に実行していくことで、市民が将来にわたって安心して働き、希望に満ちた結婚・妊娠・出産・子育てをすることができ、愛着と誇りを持って住み続けられる広島を実現していく。」としている。

すなわち、「都市間での競争を前提とする旧来のまちづくりの発想を転換して、広域都市圏を構成する23市町と連携してそれぞれの強みを生かしながら、圏域経済の活性化と圏域人口200万人超の維持を目指し、圏域全体が持続的な発展をしていくまちづくりを進める。」とする。

この都市圏構想を踏まえて令和2年6月に策定した広島市基本構想及び第6次広島市基本計画における施策として、「商工会議所ビルの移転を伴う市営基町駐車場周辺の再開発事業、広島駅南口広場の再整備、旧広島市民球場跡地イベント広場の整備、サッカースタジアム建設と飲食物販施設整備、アストラムライン延伸整備等を総合的かつ継続的に実施していくことにより、人口減少に歯止めを掛け、将来にわたって活力ある地域社会の維持を目指す。」と説明するが、そうだろうか？**身の丈〈ぶに〉に合ったまちづくり**が望まれる。

しかし、これまでの社会経済構造の大きな問題点が現実化し、経済優先の競争社会からの平準化社会へ目標転換が叫ばれている中、市の実質のない目標や構想と、これに基づく幾多の事業は、後世につけをまわさないように改めて総合的に、計画的に、段階的に再検討されなければならない。

地球環境に警鐘を鳴らすグレタ・トゥーベリさんは、「先進国や一部の金持ちは経済活動ばかり考えて、炭酸ガスを排出し続け、その結果取り返しのできない状況を作り出してきた。これらに歯止めをかけ、回復に転換する残された時間は限られて次世代の私たちにつけをまわしている。今すぐ考えを改めるべきだ。」と提唱する。

まちのリーダーは、大きな判断を続けていく〈ぶに〉を背負っている。何十年先の孫子の時代につけを回さないように責任を果たさなければならない。

何も言わないけど、**この事は多くの市民がすでに気付いている。**

ひろしまのまちづくりの動き

① 広島県、被服支廠の耐震化決定！

広島県は2019年12月に発表した最大級の被爆建物「旧陸軍被服支廠」の「2棟解体、1棟外観保存」案を撤回。3棟の耐震化を決定し、当面は最低限の利用の内部見学案として概算工事費は1棟当たり5億8千万円を想定。本格的な保存活用は今後の検討課題とし、決まれば追加の補強工事により会議室や博物館などの活用も可能とする。

また保存関連の補助金が見込める国の重要文化財指定を目指し、専門家による検討会議を設置。国と県と市が連携しながら利活用の議論を深め、財源の確保を含めた協力体制を整えることが重要となる。

自民党の関連する議員連盟も県の方針を受けて、中国財務局が所有する残る1棟も歩調を合わせるように働きかけ、重要文化財指定の権限を持つ文化庁に所管替えなどの要望を政府に提出予定。

6月の県議会で21年度補正予算に実施設計費、文化的価値の調査費、活用策の検討組織設置が承認されたので、具体に向けた準備に着手。

被爆者たちが主体となった市民団体のほか、若い人たちの地道な保存活動が世論を動かし、「物言わぬ証人」として広島の被害と加害の歴史を後世に残すことができそうだ。



中国新聞 5月20日付

② 広島・八丁堀再開発計画！

現在、広島 YMCA や市の勤労青少年ホームが入る幟町会館等が建つ広島市中区八丁堀地区に、既存ビル10棟を解体して高層ビル3棟を建て替える開発計画が進んでいる。

エリア北側の16階建てのビルには広島 YMCA が入居し、事業を継続。道路を挟んだ南エリアには15階建てのオフィスビルと28階建てのマンションを計画し、その間に現在の京口門公園を移設して憩いの場とする。

総事業費は300億～400億円規模を見込み、その3分の2を完成後のマンションやオフィスの売却益で賄い、残りは市の都市計画決定を受けて国・県・市の補助金を充てる方針。

地権者たちが2017年に「広島八丁堀3・7地区市街地再開発準備組合」を設立し、大手ゼネコンの協力を得て本計画を策定。土地・建物の権利者11者のうち8割の合意を得ているという。

今後の予定としては、今年度中に市への都市計画案の提出と決定を目指し、22年度に本組合を設立。23年度以降に順次着工して2028年度完成を目標としている。

この地区は2018年に都市再生緊急整備地域に指定さ

れ、容積率などの規制が緩和。更に2020年には特定都市再生緊急整備地域に格上げされ、税制面でも優遇される。

最近では周辺の動きも活発となり、広島商工会議所の移転先として検討されている市営基町駐車場一帯の再開発計画や本通り商店街の再開発ビルなども取りざたされている。

一方、広島駅周辺は先行して再開発が進行し、県と市は広島駅周辺と紙屋町・八丁堀地区を核とする「楕円形の都心づくり」を目指している。この地区を中四国地方最大の業務・商業ゾーンと位置付けているが、ポストコロナに向けた新しいビジョンが求められている。



中国新聞 6月1日付



イメージ図(再開発準備組合提供)

○ 広島の復興の軌跡・人物編 (第26回)

～広島復興からの公園緑地政策への貢献 浅地広さん～

はじめに

あまり資料・情報が残されていないので詳しいことは記述できないが、いくつかの資料から対象者の考え方を探っていきたい。その人は浅地広さんで、昭和53年当時、広島市公園緑地部長であったことは確か、その筋では知られた専門的技術者であった。(以下敬称略)

1. 浅地広の紹介

浅地のことを知ったのは、ある冊子（広島市青年緑化協会編「樹」）で「新時代への造園家に期待する」を草していて、そこでその志を知ることができたからであった。「若い諸君には大変な努力が要求されており、まず市民の要求度の向上、美学的構成の理解、総合好事的造園分野の拡大、このことは並みの研鑽だけでは中々達成されるものでなく日々の進歩を着実に身につけることである。」と、造園家としての研鑽を鼓舞していて、こんな人が広島市にいたのだと驚いたものであった。

そして併せて、「私事であるが、たずさわった旧満州国の建設期国都建設の壮大な公園、緑地事業にはほんとうに夢があり理想がありました。又戦後 21 年秋、広島駅から宇品港を望む一望の焼野ヶ原を眺めて広島復興の気概をもったのも若さでした。」といい、自らの気概を書き込んでいた。これによって戦前・戦中期には満州国の建設に関わり、戦後帰国して広島で復興事業に関わる決心をしたことがわかる。

2. 広島都市公園の情報源

浅地が中心となって編集したと思われる「ひろしまの公園昭和 52 年版」が、ほぼ同時期に広島市公園協会から編集・発行されている。ここで浅地は公園緑地部長として「広島市の都市公園の歩んだ道」をまとめて報告している。そこで広島市の都市公園の始まりを「広島県は明治 7 年、厳島と市内二葉の里の饒津神社境内地を公園とする免許をうけ一般に公開した。」と紹介し、さらに「明治 36 年には比治山公園、江波山の管理・利用が認められ、公開された。饒津神社境内は明治 31 年、広島県によって廃止された。」という。当時公園ではなかったが、すでに桜の名所として大芝公園付近や白島、長寿園が市民の人気になっていたようである。当時から広島市民は花見が好きだったのであり、その場所が賑わったことがわかる。

そして「昭和 7 年、広島経済博覧会開催時に第 2 会場となった比治山公園が整備され、御殿場広場、千本松原の園地、雲霓橋の架橋等が行なわれたのがこの頃であった。」という。こうして「昭和 16 年、都市計画決定としての公園 35 か所（面積 13.33ha）、緑地 4 か所（62.02ha）が認可されたこと」を記述して、「その一部は土地区画整理事業により、あるいは防空事業とあわせて整備された。」としている。しかし戦時体制の中で完成には至らなかったものも多い。浅地の市職員就任以前のことを先輩から聞き、あるいは文献として引き継ぎ、記述したのであろう。

3. 戦災復興計画としての公園緑地計画

いよいよ戦災復興公園計画については、浅地は「7つの大公園と 32 の小公園を配置するもの」と記述している。しかしこれは間違いで、当初計画では大公園 3 か所であり、別に緑地が 4 か所あるのでそれを加えたのであろう。小公園については 32 か所とあるが、多くは戦前から土地区画整理事業（耕地整理法の準用）に伴って、都市周辺部に確保されたものをそのまま継承していたのであり、新たに計画された公園も、「計画のみまぼろしの公園」としている。

すなわち「これらの公園のうち大公園用地の大半が旧軍用地の衣替えによるもので、理想に近い公園配置計画がなされましたが、その後、食料事情の悪化を少しでも補うため農地が変わったり、官公庁施設の新設等によりいくつかの公園が実現をみないまま消えていくか縮小されて行きました。」とし、例として光町・二葉の里の東練兵場跡の東公園（計画面積 17.3ha）、霞町の陸軍兵器廠跡の霞町第一公園、宇品東 7 丁目にあった宇品軍隊集合場跡の港公園（計画面積 4.96ha）、基町の第五師団司令部跡に計画された中央公園の縮小、白島の工兵第五連隊跡地の白島公園、などを挙げて実現力・事業力の欠如を指摘している。

すなわち、浅地は戦災復興計画の公園計画を理想的な計画として紹介しつつ、その廃止・縮小を嘆いていたといえるのである。ここに公園担当者としての信念・プライドのようなものを感じ取ることができる。

特に中央公園については、「中央公園内にあるテニスコートは、昭和 25 年に開催されたマッカーサー杯争奪全国テニス大会のためにつくられたもので、広島城跡の石垣を巧みに利用してつくられております。この整備には公共空地整備事業としまして、38 万円の国庫補助を受けましたが、この金額では周囲のパラペット側溝だけがかろうじて整うといった程度のもので、その他の工事はすべて失業対策事業で行われました。」といい、戦後復興事業の実態を報告している。

関連した報告として「昭和 30 年代における公園整備事業は、すべて失業対策事業に依存していたことが大きな特色としてあげられます。一時期 7 千人以上の人々が失業対策事業に就労し、このうち 2 千人余の人々が公園整備にあたっておりました。」とあり、「昭和 30 年代は（中略）戦災復興の区画整理により確保された公園の施設整備、特に緑化事業に力を注いだ時代だったのです。」「緑化事業は公園にとどまらず街路、学校、公共施設におよびました。」とある。戦災復興事業そのものと浅地の関連は不明であるが、この時代の報告者、同時代の目撃者として貴重な報告といえよう。

4. 河岸緑地計画について

河岸緑地については、「河岸緑地は戦災復興区画整理事業により、その用地が確保されておりましたが、戦後の混乱期には、その維持管理に手が回らず不法建築物（2400 戸）の占拠を許してしまいました。」と嘆

いている。さらに「昭和40年に実施した的場付近の行政代執行を皮切りに次々と作業を行い、昭和43年にはほとんどの不法建築物の撤去に成功しました。」といい、撤去後の再整備にも言及して「整備に努めた結果、都市景観は見違えるようになりました。」とまとめている。当時の担当者としては当然の姿勢であったのだろう。これが戦災復興への偽りのない総括であった。

5. まとめとして

浅地が具体的にどの計画・建設にどのように関わったのか、詳細はわからないが、公園緑地部長として昭和53年「ひろしまの公園」編集時、公園緑地政策の全体に関わり、全体を展望しつつリードし、発言する立場にあったことがわかる。特に望み通りに事業が進まなかったことも正直に報告している。

担当を転々と替わり、あの専門にあの人ありということが少なくなり、最近では頑固なぐらいその職能にかける専門的職能人も見かけなくなった。緑政課が創設されて新たな政策も展開されるようになったものの、初期の意欲も薄れてきて、公園緑地分野からの問題提起が少なくなったのではないかと、これが戦災復興期からの反省である。

(編集委員 石丸紀興)

略歴：中国(旧満州国)より帰国後、昭和26年広島市建設局緑地課在籍、35年建設局緑地課工務課係長、39年建設局公園緑地課長を経て49年公園緑地部長。公園緑地分野の権威ある第8回昭和59年北村賞受賞。

参考文献：広島市公園協会編「ひろしまの公園昭和52年版」(広島市公園協会発行、1978年)他

□ ほっとコーナー

里山から「世界」とつながる

安芸高田市地域おこし協力隊 福岡奈織

昨年、結婚を機にこれまで訪れたことのなかった安芸高田市へ引越しをしました。よく、「どちらかが安芸高田市の生まれですか？」と聞かれるのですが、そういった縁はなく、ほとんど直感でここへ。

決め手は家でした。いろんな市町の数十件の空き家が候補としてありましたが、結局、知り合いに紹介された今の家が気に入って住んでいます。

築110年ほど。「集落で一番大きい」と言われる桜の木と、茶室のような離れ、18畳の和室や馬小屋、キウイ、サクランボ、梅、柿、栗・・・など折々の果実。

縁側からは神ノ倉山を眺めることができ、水を張った田んぼに新緑の山が映ります。玄関まで来てくれるたくさんの虫、モノクロの絶景となる雪の日も最高の眺めです。

農園の名前は「**イニアビ農園**」と言います。**イニアビ**とはネイティブアメリカンの言葉で、「**すべての生命が頼る太陽**」という意味。太陽から始まるあらゆる命の神秘を勉強し、観察しながら、農薬と肥料を使わない自然栽培で野菜を育てています。

夫が群馬で教わった干し芋が得意で、ほかにもいろいろな種類の野菜を栽培します。農業体験や、民泊、スタディーツアーを受け入れたりもしています。

思えばもともと、私はバリバリと働いて出世してキャリアを築くんだと鼻息の荒いタイプの学生でした。そのために何度東京へ繰り出したことか。

しかし、フランス領ポリネシアの元核実験労働者に会いたくてタヒチ島に一月滞在したことが私の価値観を大きく変えました。

朝、日の出と共に動き出す動物と人。庭のアボカドとパパイヤがそのまま朝食になり、昼すぎに漁師から魚を買い、沖まで泳いで綺麗な海水をとってきて調理する。そんな滞在先のおじさんの、大地から頂き、大地へお返しする暮らしに身体が共鳴しました。

帰国して空港でお金をおろすために入ったコンビニで、並んでいる食べものが、すべておもちゃに見えた時。そしてその頃居候していた東京・下北沢のアパートの無機質なにおいに耐えられなくなった時。大地と共にある暮らしに向けて舵を切りました。

現在は、自宅を拠点とした農園づくりの傍ら、安芸高田市の地域おこし協力隊として「**多文化共生推進事業**」に携わっています。

市は増え続ける技能実習生など、海外からの人たちにも住みやすい地域づくりを掲げています。彼らと同じく外から地域に来た身として、この里山の恩恵に感謝しつつ、私がタヒチでお世話になったぶんも、この地域と一緒に暮らす外国から来た皆さんに恩を送りたい。

里山から「世界」とつながる拠点をつくるのが今の私の目標です。



○被服支廠キャンペーン「キャンペーンズオープンMTG！(第2回)」(*リンク参照)

テーマ：『歴史・記憶』を重んじた「にぎわい」はつくれる？

メンバー：福岡奈織、瀬戸麻由、田中美穂、松本渚

日時：2021年5月15日(土) 19:00~20:30 @ZOOM



被服支廠キャンペーンは「オンラインで被服支廠キャンペーンズと喋ろう!」と銘打ってZOOMを使ったオンライン企画を実施しており、前回のオープンMTGでは被服支廠の活用策について議論した。いろいろな提案がなされた中で、被爆の歴史・記憶を目的とした活用と賑わいのための活用が本当に両立できるのかという疑問が湧く。

そこで今回は、「被服支廠の活用において、『歴史・記憶』を重んじた「にぎわい」はつくれる？」という問いを、3つの事例を紹介しながら考え、深めていった。

☆横浜赤レンガ倉庫(旧横浜税関新港埠頭倉庫)

1911年に被服支廠と同時期に横浜税関の赤レンガ倉庫として竣工。1989年用途廃止。1992年に横浜市が国から取得し、貴重な歴史的建築資産として保存し、市民の身近な賑わい施設として活用。

倉庫を文化・商業施設に改修し、1号館の一部を横浜市芸術文化振興財団が管理して年間600万人の利用あり。イベントも多く、映画のロケ地に使われるなど賑わいと歴史の共存の成功事例。



横浜赤レンガ倉庫2号館
(wikipediaより)

☆デザイン・クリエイティブセンター神戸/K I I T O(旧国立生糸検査所)

1927年に輸出生糸の品質検査を行う神戸市立生糸検査所として竣工。1932年に国へ移管され、国立生糸検査所になる。2007年用途廃止。2008年に神戸市がユネスコ創造都市ネットワークのデザイン都市に認定され、2012年に「デザイン都市・神戸」の創造と交流の拠点としてK I I T Oを開館。

神戸市より指定されたデザイン・クリエイティブセンター神戸運営共同事業体が管理運営し、来場者数は約13万人(2019年度)。



KIITO (Facebookより)

☆旧善通寺偕行社

1903年に陸軍将校の社交場として竣工。町全体が陸上自衛隊の町のように。戦後は市役所別館、公民館、郷土資料館等として使用。2001年に国の重要文化財に指定され、創建当時の状態に復元。

善通寺市が管理し、偕行社本来の用途である社交場としての利便性を高めるため付属棟(カフェとして使用)も建設。

用途は各種会合やコンサート、展示会など。結婚式や披露宴などの利用も可。利用者11,000人、見学者7,000人(2015年度)。



旧善通寺偕行社
(善通寺市のHPより)

☆3つの事例と被服支廠の比較

・それぞれ歴史を持つ古い建物だが、被服支廠のような忘れてはいけない重い歴史は持っていない。ただ歴史を知らずに訪れても、歴史を感じさせる場所や説明はある。

・それぞれのまち全体が持つ雰囲気が違う。広島は被爆と平和都市のイメージが強い。

☆広島平和記念公園の観光客は賑わいと言えるか？

・平和記念公園には多くの観光客や修学旅行生などが訪れるが、広島原爆の歴史を学ぶために来ており、楽しむためではない。公園内で騒がしいライブなどは感覚的になじまない。

・この公園を設計した丹下健三は「平和を作る工場」と位置付けて、歴史を記憶する慰霊・鎮魂の場に加えて中央公園側に競技場や美術館などを計画。平和を反戦・反核と小さく捉えるのではなく、市民が希望をもって日常生活を楽しむことも含めていいのではないかと。

☆被服支廠に求められるものは？

・被爆建物であり、陸軍施設でもあり、被害と加害の重い歴史と向き合う場は必要。

・活用するならば、広島市民が望むもの(交流や創造など)がよい。

・活用案のワードとして資料館プラスα(娯楽施設、カフェなど賑わい施設)と言われるが、αについてはもう少し議論が必要。オープンMTGの第3回目を予定。

(被服支廠キャンペーンズ)

○ 人物登場：西村宏子氏（シュモーターに学ぶ会代表）

6月24日、「シュモーターハウス」（広島市中区江波二本松1丁目2-43）を訪問し、シュモーター氏関連の展示の説明を受けながら、シュモーター氏に対する熱のこもったお話を聞く。

★ これまでの軌跡

1957年、広島県廿日市市生まれの被爆2世。学校で平和学習を受け、知ったつもりでいたが、小学1年生の娘から平和記念公園を散歩中にあれ・これ質問され、答えられずにショックを受けた。すぐ原爆や平和に関する絵本を買い、娘と二人で読み始めた。

そのうち「将来を担う子供たちにヒロシマの出来事を伝える自分の言葉を持ちたい」と思い立ち、ピースボランティアに応募。2000年4月から広島平和記念資料館などでガイドを始める。

★ ピースボランティアを通じて

父親は中学1年の時に被爆したが、被爆体験の話は全くせず、病気がちで50歳で亡くなった。資料館の遺品展示などをガイドしながら父親の足跡をたどり、語らなかった父に思いを巡らせることも被爆体験の継承につながるのではないかと。

ガイドを始めた頃は間接話法的な説明しかできない自分に自信を失っていたが、被爆者からの励ましの言葉とシュモーター精神に触れたことにより救われた。

★ シュモーター氏との出会い

シュモーター氏が94歳の頃、米シアトルに平和公園を整備し、原爆症で亡くなった佐々木禎子の像を建立した。2003年にその像の右腕が折られ、その修復資金集めのため資料館のピースボランティア控室に置かれていた1ドル募金箱に募金したのがシュモーター氏との出会いであった。

戦後の日本になぜ来たのか？なぜ家を建てようとしたのか？疑問が募り、調べ始めた。

★ フロイド・シュモーター氏とは

シュモーター氏（1895～2001）は米カンサス州生まれの森林学者。原爆投下に衝撃を受け、「自分の頭上に原爆が落ちたかのような感覚」と心に深い傷を負い、原爆投下の罪を償おうと決意。

「戦争で傷つくのは国でもない、都市でもない、ただ人なんだ」と掘って建て小屋生活を強いられている広島に思いを馳せ、米国で寄付を募って1949年来広し、53年までに皆実町、江波、牛田の広島市内3カ所に20軒（14棟）の住宅と1棟の集会所を建てた。東京からのボランティア学生や広島の人たちも参加し、様々な違いを乗り越えて、みんなで家を作ることによりお互いを理解し合い、「平和は言うことではない、行うことだ」というシュモーター氏の持論を実践。

広島以外にも長崎と朝鮮半島で家づくりに取り組み、最後まで慈善活動と平和主義を貫く。

2012年、江波に唯一残っていた集会所を曳家し、現在は広島平和記念資料館の附属展示施設「シュモーターハウス」と命名し、被爆後の広島に寄せられた海外からの支援などを紹介している。

★ シュモーターに学ぶ会の活動

シュモーター氏に出会った2004年に「シュモーターさんの『ヒロシマの家』を語り継ぐ会」（2014年「シュモーターに学ぶ会」に改称）を結成し、シュモーター氏に関する資料を集め足跡をたどり、次の世代に伝えていく活動をしている。

シュモーター氏が建てた家に住んでいた人や家を建ててのを手伝った人など、ゆかりのある人たち取材して、小冊子「ヒロシマの家 フロイド・シュモーターと仲間たち」を発刊。

またシュモーター氏の功績を分かりやすく絵本「シュモーターおじさん」にし、絵本を通してシュモーター氏の「平和はみんなで創るもの」という思いを多くの人と共有していきたい。

2019年、シアトルに暮らすシュモーター氏の妻富子さんに会いに行き、「夫は家族のことより、世界平和のことを優先していた」という内輪話を聞く。

★ これからの抱負

未来を担う子供たちに戦争の恐ろしさだけでなく仲間と共に平和を築く大切さを伝えたい。また、各地から話を聞きたいとオファーをいただくので、シュモーター精神を広めていきたい。

* コメント *

ある新聞の見出しに「シュモーター氏に恋して」と紹介されていたが、まさにその通り。

聞き手：編集委員 前岡智之、瀧口信二（文責）



絵本を持つ西村さん

○ 『Hihukusho ラジオ (第22回) 2021.5.15』 (*リンク参照) 報告

昨年の6月より月2回、1時間程度、旧陸軍被服支廠を題材としたラジオ番組「[Hihukusho ラジオ](#) (*リンク参照)」がインターネット配信。これまで被服支廠の保存の動きに関わりのある人たちが登場している。今号は第22回目の宇城昇氏の発言の要点を紹介する。

ナビゲーター : 土屋時子 (広島文学資料保存の会代表)

ゲスト : 宇城 昇 (毎日新聞社広島支局長)

インタビュアー : 瀬戸麻由 (シンガーソングライター)



—自己紹介—

1971年に被服支廠の西側の皆実町に生まれ、大学進学で上京するまで18年間過ごす。1994年に大学を卒業して毎日新聞社に就職し、初任地は栃木県。以降12回の転勤を繰り返し、広島には2006年から3年間記者として、2010年から3年間支局次長として、昨年春から現職として3度目の勤務。現在は京都に家族を置いて単身赴任。

祖母と父(当時生後9か月)は安佐南区長束の山手の方で被爆。祖母は8年前に89歳で亡くなったが、若いころ被服支廠で働いていたと聞く。

—被服支廠の思い出—

幼稚園の頃、被服支廠近くで迷子になって、夕日に照らされたどこまでも続く赤レンガが不気味で怖くなり、迎えに来た父に連れられて泣きながら帰った覚えがある。小学生の頃は友達が被服支廠の近くに住んでおり、被服支廠西側の細い路地でボール遊びなどしてよく遊んだ。

中学校も自転車通学で被服支廠の脇を毎日のように通り、身近な存在だった。ただ被爆建物といった意識は全くなく、戦前からある古い建物という程度であった。

—記者になってから—

小学校の卒業文集には「作家になりたい」と書いており、大学卒業の時の第一希望は本の編集者だったが、ノンフィクションやルポなど書くのが好きだったこともあり、縁あって新聞社に就職。

関西圏勤務が長く、大津・奈良・京都に住んでみて、歴史の深みを感じる。先の大戦でも激しい戦禍にあっておらず、広島にはない昔の佇まいや風情が残っている。奈良では今でも平城京が話題に上がり、当時の建物がまだ残っているし、幹線道路なども1300年前のまちの区割りが今も生かされている。

—外から見た広島と広島への思い—

上京した1990年にはアストラムラインも地下街シャレオも駅前のエールエール館もなく、地方のさえない都市だった。アジア大会を契機に街がどんどん変貌し、帰省するたびに都会となり、空が狭くなるのを感じた。

入社して3年目にポーランドに取材に行く機会があり、アウシュビッツ強制収容所から生還した人やワルシャワでパルチザンとしてドイツ軍と戦った人たちと交流し、凄惨な歴史の事実を必死に訴える姿に心打たれ、自分もいつか広島と向き合いたいと思うようになった。

—広島原爆アーカイブについて—

2015年の大阪本社時代に「戦後70周年企画」の一環で新聞連載「広島原爆アーカイブ」を発案。キーワードは、戦争や被爆の体験者が高齢化し、伝承できる人がいなくなる前に次世代に継承すること。もう一つは、新聞も紙からデジタルに移行が進み、資料はできるだけデジタル化してオープンにすること。

毎日新聞は明治時代に創刊し、現存する最古の新聞社だから古い資料をたくさん持っている。被爆3日後には記者とカメラマンが広島入りして貴重な写真を撮っているし、9月のアメリカの原爆調査団にも同行し、その1週間後に枕崎台風に遭う前の写真も撮っている。さらに倉庫には被爆半年後や1年後の写真も束ねて保管されていた。

それらの貴重な写真や資料などを原爆資料館の学芸員に検証してもらい、できるだけ正確な情報を反映させてまとめたものを「広島原爆アーカイブ」として毎日新聞のサイトに公開している。毎日新聞社の財産であると共に人類の遺産でもあるので、研究者だけでなく関心のある人に幅広く活用してほしい。

—同時代から歴史へ—

広島と長崎の原爆は同時代の出来事から歴史への端境期にあり、そのうち歴史になっていく。平和問題を語る時によく使われる被害者・加害者の意識も当事者性を伴うものであり、歴史になれば体験者と同じように考えることは難しくなる。とは言え、歴史の風化を許すわけにはいかない。

2010年の国連の核不拡散条約再検討会議で、被爆者代表の谷口稜暉（すみてる）さんがスピーチの締め「私は忘却を恐れる。忘却は新しい原爆の肯定につながる。」と警鐘を鳴らした言葉に感銘。

今は新冷戦時代と言われたり、日本の核武装を唱える政治家がいたり、世界の現実は厳しいが、歴史の反省と教訓を生かさなければいけない。歯止めが利かなくなった争いの結末が広島と長崎の原爆であり、核兵器が廃絶された後も、「過ちは繰り返しません」と言い続けなければならない。

—被服支廠の扱いに対して—

一昨年の年末に「知事が被服支廠の一部解体を表明」という記事を読んだとき、被爆建物を登録している行政側から解体案が出てくるとは想像もつかなかった。

2006年に記者として広島にいた頃、被爆建物の広島旧理学部本館の動きに力を入れて取材していたが、今も使われないうま劣化している。被服支廠も同様に、せつかく被爆の実相を発信・継承できる大規模な被爆建物があるのに一向に活用されていない。

広島は原爆で昔の町並みを失ったからこそ、歴史の重層性を感じさせるために貴重な被爆建物は残しておかなければならない。

被服支廠に関心のある人にお勧めの場所は、比治山にある陸軍墓地である。そこに立てば、眼下に巨大なL字型の被服支廠を見下ろすことができるし、遠くに軍事関連の宇品港、似島、金輪島、江田島を望むことができる。

陸軍墓地の存在を考えると共に背後には旧ABC C（放影研）があり、戦後発達した広島のまちの中に軍都広島と平和都市ヒロシマを体感することができる。だからこそ被服支廠は絶対に残さなければいけない。



比治山からの眺望

（ブログ「江戸東京発今昔物語」より）

—被服支廠と原爆文学作品—

峠三吉の「倉庫の記録」は有名だが、井伏鱒二の「黒い雨」や竹西寛子の「管絃祭」の中にも被服支廠のことが描かれている。文学作品に被服支廠が登場するということは、広島のまちにとっていかに大きな存在であったかの証である。

世界から広島を訪れる人が多いのは、リアルなもの（本物）があるからであり、映像や写真やバーチャルリアリティでは決してあの被服支廠の質感は伝わらない。

解体は平和都市広島への取り返しのつかない背信であり、歴史に対する冒とくであり、未来の人に対して恥である。被爆の記憶をとどめるものを次の世代に着実に託すことは、歴史と未来に対する責務である。

—市民の町になれるか—

宮本常一が昭和40年代に書いた「私の日本地図」シリーズの中に、「広島は城下町として藩の強い統制におかれた。明治になってからも城址その他広い地域が軍に占められ、本当に市民の町になったのは戦後のことである。」という趣旨の印象的な文章を残している。

被服支廠をどう継承し活用していくか、市民の力量が試されており、本当に市民の町になれるかどうかは今問われている。その問いに自分も関わっていききたい。

コメント

報道の第一線で活躍されている広島出身の宇城氏は広島愛にあふれた人である。いろんな都市に住んだ経験を踏まえ、広島の特性を生かしたあるべき姿が浮かんでいるのではないかと参考すべき多くのヒントが込められている。（編集委員 瀧口信二）

参考資料

毎日新聞連載「広島原爆アーカイブ」 <https://mainichi.jp/ch170256497i/%E5%...>

毎日新聞連載「広島からヒロシマへ」 <https://mainichi.jp/ch190947369i/%E5%...>

毎日新聞連載「ヒバクシャ」 <https://mainichi.jp/hibakusha/>

○西国街道にまつわる活動

まちなか西国街道推進協議会ディレクター/プロデューサー 築島 渉

主に広島市のまちなかを中心に活動する『まちなか西国街道推進協議会』のディレクター・プロデューサーとして、また、広島市中区の職員が歴史資源活用のためにスタートさせたプロジェクト『ほうじゃ！西国街道で遊ぼうや』ではファシリテーターとして活動している。

江戸時代の大坂と下関を結んだ西国街道の前身は、古代に整備された古代/中世 山陽道である。「西国」九州への経路をつなぐ重要な街道として発展を遂げ、江戸時代の広島では西国往還・西国路と呼ばれたという。当初太田川河口一帯を避け北に大きく迂回していたものの、広島築城によって誕生した城下町を通るようになると、城下町・広島発展におおいに寄与し、江戸時代、西国街道上に当たる現在の本通り商店街を歩いた旅人が「一つとしてないもの(店)は無い」とその繁栄ぶりを記録に残すほどだったという。

原爆という悲劇によって失われてしまった(かのように見える)この江戸時代・西国街道の歴史を、再びまちの人の心に取り戻し、まちづくりの新たな軸にしていこうという取り組みが、西国街道沿いを生活圏とするまちの人からなる『まちなか西国街道推進協議会』である。

広島市が打ち出した「西国街道を軸としたにぎわいづくり」を基とした「歴史をつなぐ・にぎわいをつなぐ・人をつなぐ・未来をつなぐ」をコンセプトに、まずは西国街道そのものの可視化を目指してのリーフレットや案内板制作・設置に始まり、小学生に江戸時代の「我が城下町・広島」について学んでもらう『歴史発見出前授業』、目に見える形で残されていない江戸時代の歴史を、着物や江戸時代の文化を楽しみながら再現＝可視化するイベント『西国茶や Bar』、伝統工芸を現代のデザインとのコラボレーションで新たなプロダクトとし、すでに『広島漆器』や酒セット『広島醸酒 西国街道 四天王蔵』を送り出している『ひろしま西国街道ブランド』など、多岐に渡るプロジェクトを、様々な団体・企業との共創により実現している。



西国茶や Bar パフォーマンス風景

また、浅野家入城 400 年時代行列や、西国街道マンホール、道路サインボードなど、西国街道に関連した行政の取り組みにも協力をさせていただいたり、公的機関、大学、企業、地域コミュニティから多くの知恵とサポートをいただきながら、活動を続けている。

広島市中区地域おこし推進課のプロジェクト『ほうじゃ！西国街道で遊ぼうや』は、様々な課から集まった若手職員たちが、自分たちの足で西国街道を何度も歩き周り、知恵とアイデア、そして体力を結集して進行しているプロジェクトだ。

現在、まちを歩きながら歴史に関する謎を次々と解く『西国街道謎解きウォーク』、筋トレをしながら歴史を学ぶ『西国街道筋トレ』が主に進んでおり、今後は『西国街道×アート』『西国街道脳トレ』と新たな企画も目白押しである。



西国街道筋トレ撮影風景
出演者は中区役所職員

何よりも、代理店などに丸投げにすることなく、職員がゼロから企画を考案し、運営・出演すら行っているこの取り組みは、地に足のついた新たな地方自治体のあり方であり、それ故に歴史資源としての「西国街道」への本気度を感じさせてくれる素晴らしい取り組みであると思っている。

私は「街道」は広島県を横断してつなぐ「絆」になりうるのではないかと、考えている。観光資源としてはもちろんのこと、この絆が人を呼び、新たなまちづくりを産み、そこからさらなる産業を産み、「西国街道」という言葉とともに地域に再び根ざし、さらに次の世代に伝えられていく。私が一目惚れに近い形で移住を決めた広島で、そこに至るまでを見守ることができれば幸いである。

○ お知らせ

令和3年（第7回）響け！平和の鐘 祈念式

—コロナ感染症拡大防止のため簡素化して実施—

◆ 開催趣旨

2代目平和の鐘は、昭和24年（1949年）第3回平和祭で鳴らされて以来、66年もの長い間歴史の片隅に追いやられていました。平成27年（2015年）8月に鐘の音を復活させ、今年は念願だった鐘楼の補修と復元整備が完了しました。蘇った鐘楼の下で、今年も「平和の鐘」を空高く響かせ、原爆死没者の慰霊と核兵器も戦争もない世界の実現を祈ります。

◆ 祈念式

- 1 日時 令和3年8月6日（金）
9時30分～10時00分（雨天決行）
- 2 場所 広島市中央公園（基町）
2代目「平和の鐘」付近
- 3 主催 響け！平和の鐘実行委員会
- 4 式次第
 - ・代表あいさつ
 - ・黙とう
 - ・铸物鳩の市への寄贈・披露
 - ・「平和の鐘」の点打



令和2年（第6回）祈念式

◆ 連絡先

TEL 090-8606-3567（片平）

ホームページ「響け！平和の鐘」 <http://hiroshima-peacebell.org/>

□ 編集後記

広島サッカー場建設用地に被爆遺構

今号は丸9年の節目の通過点です。昨年末の第50号が大きな節目で「広島市のサッカー場建設計画に苦言を呈す」という特集を組み、メルマガとしての意思を表明しました。

それ以降は、原稿が途絶えた段階で自然消滅することを前提に、1号また1号と積み上げていくことにしています。

ところで先日、広島サッカー場の建設用地に旧陸軍施設の被爆遺構が発掘され、市はその対応に困った様子です。6月に市民向けの見学会を開く予定だったが、コロナ禍でできなかつたと言い、マスコミのみを対象にした見学会でお茶を濁す予定が、市民からの反発により市民向け見学会を開催することにしました。工事に待たがにかかることを極力恐れているようです。

コロナ禍の緊急時の中、サッカー場建設は不要不急のことで、もともと広島県の負担分（50億円）も留保されており、松井市政の見切り発車の責任が問われることになりそうです。

このままでは事業者とも契約できないし、事業者も作業を進めることに二の足を踏むことになるのではないのでしょうか？

今回の旧陸軍の被爆遺構も予想されたことであり、本来ならば事前に調査し、その結果を踏まえて事業者からの提案を求めるのが筋でした。そうすれば、遺構を活かす形の提案がなされたことでしょう。

後手後手で場当たりの市の対応はお粗末の極みです。市長の責任問題にまで発展するのではないかと危惧します。

（編集委員 瀧口信二）

編集委員

石丸紀興	広島諸事・地域再生研究所主宰
高東博視	響け！平和の鐘実行委員会代表
瀧口信二	広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷 章	ガリバープロダクツ代表
前岡智之	中国セントラルコンサルタント代表